富山大学極東地域研究センター
CFES News Letter
Center for Far Eastern Studies, University of Toyama
2015.06 発行
Vol.18

I ASSW2015 成功裏に終了

2015 年 4 月 23 日から 30 日まで富山国際会議場（富山市）で開催された ASSW2015（北極科学サミット週間 2015)は、大盛会のうちに終了しました。この期間中、国際北極科学委員会関連会合、公開講演会、第 3 回国際北極科学計画会議（ICARPⅢ）、第 4 回国際北極研究シンポジウム（ISAR-4）が開催され、27 カ国から 708 名の参加がありました。最後には、Integrating Arctic Research: A Roadmap for the Future と題して会議声明が表明されました。

8 つのメッセージ(北極の急速な変化に対する科学的知見の現状、政策決定者や一般市民による認知、持続的な観測およびプロセス理解のための取り組み体制、今後の北極研究に関する連携、非北極圏国からの参加を含む科学的な国際協力の強化、先住民コミュニティが持つ伝統的知恵の有効活用、観測や研究を長期的に支える仕組み作り、そして最後のひとつが科学者・コミュニティ・政府・産業界を巻き込みながらの強靭な北極地域社会のための持続可能なインフラストラクチャーの発展や革新をもたらす共同取り組み）を含む会議声明は、「 http://www.assw2015.org 」 の 「 Conference Statement」からダウンロードできます。

写真 1: ASSW2015 の後半に開催された第 4 回国際北極研究シンポジウムの開会式（写真：ASSW2015 事務局）

（文責：杉浦幸之助、ASSW2015 ISAR-4/ICARPⅢ -Remote Sensing of the Arctic System-セッションコンビーナー）

II ノルウェー北極大学との交流

北極圏内に位置しているトロムソは、人口約 7 万人のノルウェー北部における中心都市ですが、白夜やオーロラを体感・観察できる観光地としても有名です。ここに、国立大学のノルウェー北極大学（UiT The Arctic University of Norway）があります。英語あるいはノルウェー語表記では、UiT という名称が付いていますが、これはトロムソ大学（University of Tromsø）のノルウェー語略字です。前身であるトロムソ大学は、1968 年に設立され、1972 年に開学しました。2013 年にはフィンマルク大学校と合併して、ノルウェー北極大学が誕生しました。健康科学部、理工学部、人文社会科学教育学部、生物科学水産学経済学部、法学部、芸術学部の 6 学部を有する総合大学です。主な教育研究活動は、オーロラ研究、宇宙科学、漁業科学、バイオテクノロジー、言語学、多文化社会、サーメ民族文化、遠隔医療、疫学および広範囲に及ぶ北極研究プロジェクト等です。ノルウェー極地研究所やノルウェー海洋研究、並びに極地環境センターのすぐ近くに位置していることから、ノルウェー北極大学は北極圏研究の国際拠点としての重要性も有しています。

写真 2:ノルウェー北極大学構内で飼育されているスバールバルライチョウ（写真：和田直也）

筆者は、1996 年に北極研究プロジェクトに参加し、スバールバル諸島ニーオルスンにて氷河末端域に生育する植物の生態を調査しました。この時、当時大学院生であったエリザベス・クーパー先生に出会いました。現在、クーパー先生はノルウェー北極大学の教授となり、日本に来るたびに富山大学を訪問して下さるようになりました。このような交流をきっかけに、富山大学理学部や経済学部が中心となって、ノルウェー北極大学と本学との学術交流協定が締結されようとしています。北と東の果てに位置している両大学ですが、協定が締結されることで心の距離が近くなり、学生と教員の教育研究面での交流が大いに期待されます。興味を持たれた皆さんも是非交流に参加して頂け

ればと思います。　　（文責：和田直也）

III 経路依存の移行経済論

中東欧・旧ソ連諸国の市場経済化における広範な制度変化・制度形成の分析において経路依存性という概念は重要な役割を果たしてきた。この概念は、コロンビア大学のデヴィッド・スターク教授が中東欧において民営化の政策決定の違いによる多様な制度変化をもたらしたとする 1992 年の研究に起因するとともに、ノーベル賞研究者である D.ノースなど新制度学派の影響を背景とする。経済が時間をかけて進化し制度や市場のルールを形成する適応最適性の議論も含め、移行初期の偶然の選択や初期条件が多様な制度発展の経路を生みだし、多様な移行経済のあり方を提示する可能性を経路依存性という概念は持っている。

初期の政策決定や偶然の出来事によって市場経済の発展経路が分岐するという単なる歴史決定論ではなく、変化を求めるアクターが変化の障害になっているものを克服するための資源を必要とするとき、既存の制度を資源として利用し、結果、新たに導入された制度との「組み換え」による移行経済独自のブリコラージュな状況が生まれる様を説明するために経路依存性アプローチは有効ではないか。平成 27 年度京都大学経済研究所共同利用・共同研究拠点プロジェクト「経路依存の移行経済論」で私が研究代表者としてプロジェクトを企画した動機は、ここにある。また、それはスターク教授とお会いし、助言を得て考えた展望だった。

国内共同研究者に加え、海外の研究者にこの研究企画のコンセプトを伝えて参加を呼びかけると、思いのほか同じ問題関心でロシアや中東欧を考察したいと意気込む同志がいることがうれしかった。フィンランドのユヴァスキュラ大学のサピラ博士からは、もう執筆予定の論文題名まで頂いている。ピンときたんだそうだ。ロシアの労働組合研究で知られるロシアの独立社会研究センターのオリンピエヴァ博士からは、「私もスタークは大好き！特に，ブリコラージュってところがいいね！」と早速論文に取り組んでくれている。他にも、参加しようって言ってくれる友人達もでてきて、なんだかにぎやかだ。来年 1 月ぐらいに国際シンポジウムを開催しようと目論んでいるが、いまから彼らと経路依存性をめぐってのバトルが楽しみになってきた。今後の本プロジェクトの企画は、京都大学経済研究所や本センターで広報します。

（文責：堀江典生）

IV 地域研究四方山話(14): 西双版納の蕨

お正月休みに、暖かさを求め、中国雲南省のシーサンパンナ（漢字名；西双版納）に行ってきました。中国雲南省はベトナム、ラオス、ミャンマーに接する暖かいところで、民族の多様性と植物の多様性がその特徴で、またその代表格はやはりシーサンパンナ・タイ族自治州です。シーサンパンナは熱帯気候に属し、いろいろな植物があり、いわゆる植物王国です。行ってみたら、実に感心させられるところが多くありました。たくさんの植物を観ましたが、忘れられない植物の一つが蕨です。

シーサンパンナとラオスの国境辺りに、望天樹観光景区があります。その中のフィリップ散歩道（イギリスのフィリップ親王が視察したことに由来する名前）を辿ると、いろいろな今まで見たことのない植物を目にすることができます。小道の終わるところで、ガイドさんが足下で茂っている植物を指しながら、「これは最古の蕨で、何百万年前からもある植物だ」と教えてくれました。日本では、蕨はよく食べられる山菜のひとつとして知られていますが、実は蕨の特徴などを私はまったく知りませんでした。この「最古の蕨」をよく見ると、穂先が尖っていて、茎も細くて、とても柔らかくてみずみずしく見えます。

写真 3: 日本の蕨(左)とシーサンパンナの水蕨(右)

森を出ると、すでに夕方で、町の食事処に入ってメニューを見ると、いろいろな野菜炒めがありました。日照の長い雲南は野菜が美味しいのですが、その中の一品を特に薦められました。それは「水蕨」というこの地方の特別な蕨の炒め物でした。食べてみたら、柔らかめのしゃきしゃきした歯応えが、実に美味でした。通常、蕨をとってきても、下処理しないと食べられませんが、この水蕨は下処理もせず、そのまま食べられるそうです。シーサンパンナに来ないと食べられないものと聞いて感動する一方、シーサンパンナはあまりにも遠く、今回の体験は一生に一度のことで、これからもう食べられないかもしれないと思うと、少し寂しい気持ちでした。　　（文責　馬駿）

【追記】

当センターは、組織改編による名称変更で、2015 年 4 月より「富山大学 研究推進機構 極東地域研究センター」となりました。

連絡先住所：〒930-8555　富山県富山市五福３１９０　富山大学 研究推進機構 極東地域研究センター
電話：076（445）6510　ファックス：076（445）6520
ホームページ <http://www3.u-toyama.ac.jp/cfes/indexJP.html>